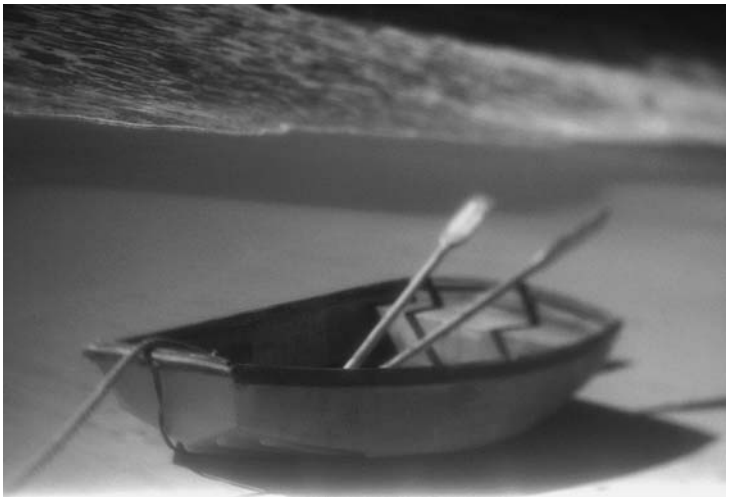
46　由良の門を　渡る舟人　梶を絶え　行方も知らぬ　恋の道かな

曾禰良忠



波打ち際のボート

〈声に出してよんでみよう〉

ユラノトオ　ワタルフナビト　カジオタエ

ユクエモシラヌ　コイノミチカナ

＊ワ行オ段の「**を／ヲ**」は、古語では［wo］と発音し、助詞以外の一般の語にも用いられていました。11世紀初め頃、ア行オ段の「**お／オ**」が［o］から［wo］に変化したため両者の発音の区別が失われ、さらに17～18世紀頃、両者ともに［o］と発音されるようになり、現在に至っています。

＊「づ」は、「ズ」とよみます。「**ジ**」と「**ヂ**」、「**ズ**」と「**ヅ**」は、以前は違う発音だったのですが、16世紀頃から混同されるようになり、現在では高知や九州南部などの方言を除いて、違いはほとんどなくなっています。[1]

＊語頭以外のハ行の文字、つまり語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、ワ行音「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[2]　これを、「**ハ行転呼音**」と言います。

〈どんな意味だろう〉

由良海峡を渡る舟人が、梶を失くし、どこに行くのか分からなくなっているように、どこに行くのか全く分からない、恋の道であることだなあ。

＊初句から第３句までは、第４句「行方も知らぬ」を導き出すための修飾の部分です。このような技法を、「**序詞**」と言います。枕詞が、通常五音で、導き出す言葉と導き出される言葉の関係が固定化しているのに対し、序詞は、長さも、どのような言葉でどのような言葉を導き出すかも自由です。この技法は、イメージを重層的に膨らませる効果があります。

＊「門（と）」は、海や川で両岸が迫り、水流の出入りする所を言います。「港（みなと）」の語源も、「水な門」です。

＊第５句末の「**かな**」は、**詠嘆**を表す終助詞です。現代語と違い、疑問の意味ではありませんので、注意しましょう。

〈解説〉

梶を失くし、大海の中を漂う小舟の心細さと、恋の不安を、巧みにオーバーラップさせた秀歌です。比喩も、少しも古びた感じがしません。山に囲まれた狭い都から解き放たれ、のびのびと大海に歌の翼を広げているような、スケールの大きささえ感じさせてくれる歌です。

1000 年以上前の人でも、恋のやるせなさや、あてのない不安などは同じなのだと思うと、親しみが湧くような、何だか不思議な気持ちがしませんか？

〈作者と出典〉

作者は、十世紀頃の歌人。生没年も経歴も未詳です。この歌の出典は、８番目の勅撰和歌集（天皇の命令で編集された和歌集）である『新古今和歌集』です。

[1] 「じ」は [ʒi]、「ず」は [zu] と発音します。これらは、現代も同じです。発音が変化したのは「ぢ」「づ」です。これらは、8世紀頃には [di]、[du] という発音だったのですが、16世紀頃から、[dʒi]、[dzu] と発音されるようになり、やがて、[ʒi]、[zu] に変わっていった、と考えられています。この発音の変化は、「ち」「つ」の発音が [ti]、[tu] から [tʃi]、[tsu] に変化したのと並行するものですが、なぜこれらの変化が生じたのかはよく分かっていません。

[2] ハ行の子音は、8世紀頃 [p] から [ɸ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて11世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の [ɸ] が [w] と発音されるようになりました。なお、[ɸ] が [h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、17世紀頃と推定されています。